

遊びにいく di choi から考えるベトナム社会

遠藤 聡

■ 講演者……遠藤 聡（神田外語大学非常勤講師）

■ 司 会……林 史樹（本学アジア言語学科教授）

ベトナムは長い戦争を経験し、また今日においても社会主義国である。しかし、そうした歴史を通じて、あるいはそうした時代のなかにおいても、そこに暮らすベトナムの人々は、明るさや活力を忘れなかった。そうしたかれらの気持ちが現在の経済成長を実現しているベトナム社会の深層にあるのかもしれない。本稿では、歴史・社会状況を踏まえたくうえで、挨拶にもなっている「di choi」（遊びにいく）というコトバのやりとりからベトナムの人々の関係をみていく。

ベトナムの近現代史

ベトナムは、近現代史において長い植民地支配および戦争を経験しなければならなかった。一八八七年にフランス領インドシナ連邦が成立し、ベトナムは、カンボジアとラオス（一

八九九年編入）とともにフランスの支配下に置かれた。一九四〇年には日本軍の支配（仏印進駐）がはじまり、ベトナムは、フランスと日本による共同支配に苦しんだ。日本敗戦後の一九四五年九月、ベトナム民主共和国の独立宣言がなされたが、この宣言は国際社会からは認知されず、フランスは再植民地化をはかった。こうして、一九四六年十二月、ベトナム民主共和国とフランスとの間でインドシナ戦争が勃発した。この長い戦争のなか、アジアに冷戦構造が覆った。一方でフランスは一九四九年七月、親仏のベトナム国を樹立していた。そして一九五四年七月、ジュネーブ協定によって、ベトナムは北緯十七度線を境に、北にベトナム民主共和国、南にベトナム国が配されることとなった。

フランスの撤退後にベトナムに現れたのがアメリカだった。共産主義が近隣諸国を踏破するというドミノ理論により、自由主義の南ベトナムを存続させるべく、一九五五年十月、反共親米のベトナム共和国を樹立させる。こうして社会主義の



講演する遠藤先生

北ベトナム、自由主義の南ベトナムという分断国家ができあがった。国家統一を目指す北ベトナムは、一九六〇年十二月、南部に南ベトナム解放民族戦線を結成し、南ベトナムベトナム戦争が始まった。アメリカは、一九六五年三月から軍事介入をし、北部には北爆を南部には地上軍を展開した。こうして激しい戦争となったベトナムでは、パリ協定により米軍が一九七三年に撤退するものの、同一民族同士の戦いは続いた。一九七五年四月、事実上、北ベトナム軍が南ベトナムを敗北させるかたちでベトナム戦争は終わり、一九七六年七月、ベトナムはベトナム社会主義共和国として統一した。しかし、長い支配や戦争から解放された時間は短かった。南部では急激な社会主義的改造が行われ、資産家・地主層・エリート層への弾圧や、再教育収容所での「思想改造」も行われた。こ

うしてポートピープルと呼ばれる大量の難民が流出した。これらにとつて、「祖国」はそこには築かれなかったのである。さらに、一九七八年十二月、ベトナムがカンボジアに軍事侵攻をし、親ベトナムのカンボジア人民共和国を樹立させるとともに、ベトナム軍をカンボジア領内に駐留しつづけた。カンボジア問題は、ポル・ポト政権下での大虐殺、中越戦争（一九七九年二月）などの問題を抱えつつ、その解決は冷戦の終結を待たなければならなかった。カンボジア和平協定が締結されるのは、一九九一年十月であった。

ベトナムの政治体制・経済体制

難民問題やカンボジア問題などで国際社会から孤立したベトナムは、ソ連・東欧圏からの経済援助に依存する社会主義経済体制を形成せざるを得なかった。国営企業や農村での合作社にみられる集団化や、バオカップ (bao cấp) と呼ばれた国家補助金制度は、人々の勤労意欲を奪っていった。米などの食料品や生活必需品は、配給切符による配給制度で支給される状況を生んだ。こうしたなか、ソ連圏の経済状況が悪化し、ベトナムに対する経済援助が激減した。ベトナムは、新たな道を模索しなければならなかった。

一九八六年十二月、ベトナム共産党第六回大会でドイモイ (đổi mới) が採択され、市場経済の導入と対外開放政策が

推進されることとなった。ところで、このドイモイとは、冷戦という時代のなか、ソ連圏が存続していくことを前提として策定されたものである。そのため、共産党一党支配の下、市場経済化による生産性の向上と全方位外交を進めたのち、将来的には社会主義経済に復帰するという「社会主義市場経済」という名称が必要であった。ところが、冷戦の終焉そしてソ連解体という国際社会の衝撃がベトナム政治を襲った。

一九八九年十一月のベルリンの壁崩壊、同年十二月の米ソ冷戦終結宣言、その後のソ連・東欧圏における民主化の波を経て一九九一年十二月、ソ連が解体した。市場経済化を進めていたベトナムには共産党一党制を堅持していく説明が必要となった。そこで登場したのが、ホー・チ・ミン思想である。共産党の創設者であり、建国の父であり、また「ホーおじさん」と親しまれてきたホー・チ・ミンのシンボル性が必要であったからである。一九六九年に死去していた彼の「共産主義者の顔」ではなく、「民族主義者の顔」が喧伝された。そしてこの頃、ベトナム社会における伝統や文化の復興が叫ばれるようになった。

経済面においては、ベトナムは順調な経済成長を遂げるとともに国際経済に参入していった。一九九五年に ASEAN（東南アジア諸国連合）、一九九八年に APEC（アジア太平洋経済協力会議）、二〇〇七年には WTO（世界貿易機関）へ

の加盟を果たした。ハノイやホーチミン市では、近代的な高層ビルが立ち並び、道路に溢れるオートバイの洪水、最近では豊かさの象徴でもある自動車の行き交いも多くみられるようになった。一方で、山間部・農村部・離島などでは開発の波から取り残され、経済的格差が広がっている。「工業化・現代化」のスローガンとともに、「公平・民主な社会」の実現が叫ばれた。

コトバの時代性

ベトナムでは、挨拶としてのコトバはあまり使われない。たとえば「シン・チャオ」(xin chào) は、「おはよう」、「こんにちは」、「こんばんは」のほか、「さようなら」の意味さえももつが、ベトナム人の間では頻繁には使われないようである。またお礼や謝罪のコトバもあまり使われない。「ありがとう」(cảm ơn)、「すみません」(xin lỗi) などである。とはいっても、ベトナムの人々は会話が大好きである。延々と話が続き、こともある。ベトナムの人々は、かれらの会話の時と場を楽しんでいるとも思われる。挨拶はさりげなく、おしゃべりを楽しんでいられるかもしれない。

一方で、ベトナムでは、次に掲げる人称代名詞に象徴されるように、人と人の関係が大事にされる。ベトナムに行くと、年齢や職業など、さらには結婚をしているかなどを頻繁に聞

かれる。これは、自分と相手との社会的な関係を見極める必要があるからである。年齢、性別、身分、親しさの度合い、尊敬の度合いなどが、「私とあなた」の人称代名詞の使い方につながる。日本と同じように、「先生」(thầy)、「おじさん」(ông)、「おばさん」(bà)、「お父さん」(cha)、「お母さん」(me)、「お兄さん」(anh)、「お姉さん」(chị)など、他称にも使われるし、自称にも使われる。年下に使われる「子供」(em)は、年上の者に対する自称としても、また恋人の女性相手にも使われる。一般的な一人称代名詞としては、「私」(tôi)を使った方が無難であろう。

こうしたベトナム社会におけるコトバの時代性をみてみよう。革命や戦争の時代にあつては、「独立」(độc lập)、「自由」(tự do)、「革命」(cách mạng)、「勝利」(thắng lợi)、「団結」(đoàn kết)、「統一」(thống nhất)、「平和」(hòa bình)、「救国」(cứu quốc)などのコトバが当然のことながらスローガンとして使われた。そこには、これらのコトバを信じていた人のほか、言わされていた人もいたであろう。これらのコトバは、ホテルなどの名称にも使われた。ベトナムはいまでも「スローガン」の国であり、前述のコトバは、ここに残っている。これは、立て看板を通じてという意味である。人々の賑わいのなか、街角に立っている看板は、この国が社会主義国であることを思い出させてもくれる。

ドイモイ後、豊かな社会へ歩みだした一九九〇年代前半では、「貧しい」(nghèo)というコトバがまだ頻繁に使われていた。外国人観光客相手の場合が多いが、「私たちベトナム人は貧しいですから」とよく言われた記憶がある。またほかのアジアの国と同様に、日本のTVドラマの「おしん」(Oshin)が人気を得ていた。日本の経済成長に自分たちの夢を重ねていたのであろう。順調な経済成長が進んだ二〇〇〇年代に入ると「おしんビジネス」なるものが現れた。家庭内労働者(メイド)として、農村から都市へ、また海外出稼ぎ労働者の通称に使われた。ちなみに、街中狭しと走り回るオートバイ(xe máy)は「ホンダ」(Honda)と呼ばれている。

また、時代とは関係なく使われているコトバとして、当然のことではあるが、「báo nhiêu tiền?」(Báo nhiêu tiền?)や「cười ít lắm rồi・問題ありません」(không có gì)がある。ベトナムの街を歩いていると、「数字」のやりとりがよく聞かえてくる。これは主に「金額」としての数字である。「いくらですか?」「まけてよ!」という商いの場のやりとり以外でも、「いくらで買ったの?」「何々はいくらするの?」という会話のなかで「数字」が行き交うのである。「どういたしましよて」は「ありがとう」の返事として使われるが、「問題ありません」は英語の「no problem」と同様な使われ方もされる。ベトナムで道を尋ねると、親切にも同行して案内してくれる

ことがある。こちらが「ありがとうございます」というと、「どういたしまして」と答えが返って。全く違った場所に案内されたときには、「ノープロブレム」の意味でこのコトバが使われることになる。

di choi (遊びに行く)とベトナム社会

ベトナムでは、挨拶としても使われる di choi というコト



街を走る「ホンダ」

バがある。di は動詞で「行く」という意味であり、choi は主に動詞として「遊ぶ」や「楽しむ」の意として使われるが、動詞に後置される使われ方もある。すなわち di choi で「遊びに行く」、「ちょっとおでかけ」、「散歩する」の意として使われる。書き言葉では、主語、目的地、相手などを置いて成り立つが、話し言葉では、di choi が単独で使われる場合がほとんどである。二十年近く前、筆者がベトナムのハノイで資料調査をしていたとき、留学や調査に来ている日本人の下宿先や寮に電話をかけてみると、とりつがれるコトバは di choi である場合が多かった。実際には、遊びに行っているのではなく、大学でベトナム語やベトナムの歴史を勉強したり、公文書館で資料を収集したり、社会調査をしている場合が多かった。

「行く」(di) は、普通の使われ方としては、学校に行く、仕事に行く、入信する、旅行に行く、外国に行く、受験する、出家する、寝る、入浴する、便秘をする、死ぬ、結婚する、再婚する、商いをする、買い物に行く、外国に行く、芝刈りに行く、破産する、小便をする、大便をする、漁に出る、死ぬなど、具体性をもつ語を後置し、意味自体にも具体性を有する。「遊ぶ」(choi) は、「遊ぶ」、「楽しむ」のほか、ほかの語を後置して、スポーツをする、テニスをする、サッカーをする、楽器を弾く、将棋を指す、カルタをする、トラランプを

する、道楽をする、役を演じるなどで使われる。英語でいえば、di は「go」、choi は「play」である。この二つの語をつづけて di choi とすると、「行き先や相手という具体性を有しない使われ方がされるのである。「遊びに行く」(di choi) は、「あいまいなき先」を許容し、「あいまいな相手」をも許容する。特別の目的なしにぶらぶらとするという散歩の感覚に近い普通の娯楽や、今日では、特別な目的なしにバイクを流すといった「夜の娯楽」にも使われる。ハノイやホーチミン市などの都市では、夜になると多くの人々がオートバイで街中を走り回る。一人乗りで、友達や恋人との二人乗りで、家族で楽しむ三人乗りから五人乗りで。近年ではヘルメット着用が義務付けられたが、かれらの顔はみな楽しそうである。街を歩いていると、呼びかけのコトバである「やあ」(oi) が飛び交う。英語では「Hey」の感覚に近い。返すコトバは、ニコッと笑って di choi である。

ベトナムでは、戦争や社会主義経済の失敗など、苦しく貧しい時代を送らなければならなかった。そうした時代にあっても、人々は「笑顔」の代わりにこのコトバを使ってきたのかも知れない。たとえ、遊びに行くわけでもないのに、遊びに行くところがないのに、一緒に出かける相手がいないのに、どんなときでも、明るく、活力をもって暮らす人々の間で「挨拶」として使われたのではないだろうか。戦争や配給制度

(Đạo cảp) 時代を知らない世代が半数を占め、またドイモイが開始され二七年を過ぎ、豊かさが実感できる人々が増えていく今日において、「di choi」というコトバのやりとりに、人々の明るさを感じる。

参考文献

- 今井昭夫・岩井美佐紀編著『現代ベトナムを知るための60章』(第二版) 明石書店、二〇一二年。
 小高泰監修『ベトナム検定』めこん、二〇一〇年。



家族で楽しむ



友達と楽しむ